

## 第9章 結論と今後の課題

### 1. 本論文のまとめ

本論文では、『玉塵抄』における漢字音研究の解明を目的として、様々な方面から考察を行ってきた。考察の結果をまとめると、以下の通りである。

(1)第3章では、『玉塵抄』と原典である『韻府群玉』の引用文献を比較することによって、『玉塵抄』と『韻府群玉』の性格を浮き彫りにし、そして、惟高妙安が『韻府群玉』のどのような引用文献に関心をよせていたか、どのような立場に立って『玉塵抄』の講釈を行っていたのかなどを明らかにしようとした。その結果、『玉塵抄』は原典『韻府群玉』の引用文献をそのまま引用している一方、独自に様々な文献を用いて、『韻府群玉』本文を離れた独自の講釈をも行なっていること、つまり、引用文献の上から、『玉塵抄』が単なる原典の講釈にとどまらず、百科全書的知識を盛り込んでいる抄物であることを確認した。なお、『玉塵抄』は、『韻府群玉』があまり引いていない、もしくは全然引いていない字書や韻書を用いて、漢字や漢字音研究を積極的に行っていることが認められた。

(2)第4章では、『玉塵抄』の中で、韻書利用の実態と引用された内容を検討して、惟高妙安の漢字研究のあり方と韻書の受容を考えてみた。その結果、漢字音研究においては『韻会挙要』を最も重視しており、続いて『玉篇』を反切の面で重視していること、『韻会挙要』と『玉篇』は漢字音研究で単独で用いていることもあること、その一方、一般注としての引用においては、『韻府群玉』と『韻会挙要』両書、特に『韻府群玉』を重視していることなどが明らかになった。なお、『広韻』『聚分韻略』『礼部韻略』は、一般注としてよりは漢字音研究において利用している場合の方が多いが、これらを単独で用いることはなく、『韻会挙要』や『韻府群玉』などの補助として利用しているだけであることも認められた。

(3)第5章では、『玉塵抄』の中で漢字の字音の系統と対立について説明している部分を

取り上げ、室町期の学問の場において呉音と漢音の伝来、またその当時の漢字音と漢字音との対立の実態を把握し、その対立に関わって『文明本節用集』を参照しながら、それら対立している呉音漢音との関係を検討した。その結果、『玉塵抄』の中に見出される仏典と漢籍での字音の対立、日常的な生活の場における音と学問の世界での読書音との対立などは、呉音・漢音の対立と関連していることがわかった。また、一般に慣用的に行なわれている音と韻書等による規則的な音との対立や、自分が所属しているところでの音とそうでないところでの音の対立は、呉音・漢音の別とは直接関係していないことも判明した。

(4)第6章では、『玉塵抄』と『詩学大成抄』における「清」「濁」の注記がなされている漢字について、その『韻鏡』図上における分布を調査し、そしてそれと『邦訳日葡辞書』との比較などを行い、注記の意図を考えてみた。その結果は、以下のようにまとめられる。

#### ①傍記すなわち「清」傍記

主として漢籍の正統な読書音すなわち漢音系の字音を示すために加えられた。

#### ②注釈

(ア)「清」注釈は、漢籍において清音であるべきものが濁音に読まれるおそれがある場合、もしくは、連濁を避けるためにも行なわれた。

(イ)濁音字への「濁」注釈はその当時の日常音を、清音・次清音字への「濁」注釈は読書音としての濁音をそれぞれ示すために行なわれた。

(ウ)「清」「濁」注釈は、読書音における清濁上の読みの乱れと呉音・漢音における清濁の対立を示すために行なわれた。

(5)第7章では、『玉塵抄』における反切とその出典、また反切による音と現実音との関係、そしてそれと『文明本節用集』の漢音との関係などを検討した。その結果をまとめると、以下ようになる。

①反切は、惟高妙安が字音の読み方を決めて行く上で重要な基準となっている。彼は主として『韻府群玉』を、他に『玉篇』を始めとする『韻会挙要』『広韻』等の中国韻書、さらには国書である『聚分韻略』も用いている。

- ②反切音を導く方法としては、五十音図を利用したいわゆる仮名反を用いている。
- ③(①で述べたように、)妙安は、反切音は反切音として重視しながらも、反切音と現実音が違う場合は現実音を優先している。
- ④反切音による字音はその当時における漢音とかけ離れている場合もある。一方、現実音は『文明本節用集』で漢音として示されるものほとんど一致している。
- (6)第8章では、「ヨミクセ・クセ」「ヨミツケ」などといった読み癖がどのような漢字音について用いられていたのか、またそれはどのような性格のものかなどについて考えてみた。その結果、次のようなことが明らかになった。
- ①五山系抄物にしか現れていない「ヨミクセ」「ヲシツケ(ヨミ)」の内、「ヨミクセ」は『史記』『漢書』での特別な読み方であった。
- ②(①に対して)「ヲシツケ(ヨミ)」は、『史記』『漢書』を勉強していない人の読み方であった。
- ③五山系博士系抄物両方に現れている「ヨミツケ」は、いろいろな漢籍の漢語や人名・地名などに広く用いられていた、主として呉音系の字音であった。
- ④両系に現れている「名目」は、平安初期以前に成立した旧仏教や公家その他に伝統的に伝わっていた読み方であった。

## 2. 漢字音研究史上における『玉塵抄』

以上、日本における漢字音研究史ないし受容史の中に、室町期抄物、主に『玉塵抄』における漢字音研究を正確に位置づけることを目指して考察を進めてきた。その結果、室町期における漢字音研究史、加えて漢字音そのものの実態の解明の二点において、次のような結論を得た。

序論で述べたように、妙安は漢籍の『韻府群玉』を講述した『玉塵抄』の中で、そして、禅僧としての生活の中で異なる三つの系統の異なる漢字音を正確に使い分けなくてはなら

なかった。ところで、五山叢林はもともと仏教の一宗派であり、当然いろいろな点において旧仏教と深く結びついていた。その典型は読誦音である。一部仏典を除くところには旧仏教が使用していた呉音がそのまま取り入れられていた。禅僧はこの読誦音によく通じていなければならなかったが、この読誦音に関わっては旧仏教各宗派、特に南都仏教と天台宗それぞれにおいて、また、場合によっては南都の各宗派ごとに、さらには各寺院ごとに慣例的な決まっていた読み方が多かれ少なかれあった。可能な限り、それについても通じていることが求められた。

一方、禅僧は学問、つまり、儒学を通じて儒者とも深く交わっていた。本論文第8章で述べたように、その儒者は漢音を読書音としていたが、その読書音については、特定の漢語について特定の読み方があったり、それぞれの学派、博士家に特別な読み方、つまり読み癖などがあつたりもした。すぐれた禅僧にはそれに対する知識ももちろん求められた。

このような、漢字音をめぐりいろいろな要求に応えるために、妙安は、『玉塵抄』において、使用場所による漢字音の対立を講述したり、漢字音の系統を論じたり、清濁を注記したり、また反切から字音を決めたり、あるいは、自分の所属しているところの特別な漢字音を示したりなどした。そこには、当然仏教からの漢字音や漢字音研究と、儒者からのそれとが入り交っていた。すなわち、妙安、というより叢林は仏教と儒学と関わりながら、叢林独自の漢字音研究を行っていたのである。また、旧仏教あるいは博士家と深く関わり合いながら、それと対立する叢林独自の漢字音を使用することもあった。ただし、研究についてみると、『玉塵抄』のも含めてその当時の叢林における漢字音研究は、漢籍もしくは禅宗典籍の注釈の一環として行われていたにすぎなかった。これは仏教においても同様であるが、すなわち、漢字音そのものの研究を目指すものとして行われていたわけではなかった。

なお、漢字音そのものについては、妙安さらには、その当時の五山禅僧においては、呉音と漢音の分類においてある程度共通の理解があつたが、逆に相違もあつた。これは、漢字音使用において当時特異な立場にあつた叢林の、その内部には呉音漢音の分類をはじめ

として、いろいろな点において共通点と相違があったことを反映している。

また、反切についても、『玉塵抄』において漢音を表す反切音が『文明本節用集』の漢音とずれていることが確認された。つまり反切音による字音はその当時用いられている漢音とかけ離れている場合もあるが、現実音は『文明本節用集』で漢音として示されるものほとんど一致しているのである。

さて、馬淵和夫(1961)は、日本の韻学について次のように述べている。

(平安期は)やはり儒家のがわには、詩文の実作はさかんであったけれども、韻の学は一向におきなかった様である。(I・p.16)

また、馬淵(1970)は、次のようにも述べている。

当時(鎌倉中期)の韻学は儒家のあいだではすでにすたれてしまっていたが、仏家のあいだでは、まださかんに研究されていたのである。(「韻鏡研究史考」p.56)

馬淵の言う韻学は悉曇学が中心となっているので、それと無縁の儒学を仏教と安易に比べるのは危険であるが、本章1で述べた『玉塵抄』における漢字音研究や、本論中でおろり参照してきた他の抄物の漢字音関係の講述、さらにはその編者が禅僧と言われる『文明本節用集』の呉音漢音の分類などを踏まえると、仏教の一宗派でありながら当時日本で儒学がもっとも盛んに行われていた禅林においては、禅林なりの韻学すなわち漢字音研究が盛んに行われていたとしか考えられない。もちろん、それはこれまで見てきたように、今日の研究水準に立てば、いろいろな漢字音関係の知識の単なる羅列であったり、反切を利用した仮名反によって漢字音のことを議論するといった程度のものであり、必ずしも漢字音そのものを深く穿鑿しているわけではない。

例えば、声調や韻などについて言えば、『玉塵抄』の講述や、中世における韻書の利用法、さらには漢籍の読書や注釈の盛況また『文明本節用集』の声点加点などを考え合わせると、声調や韻についての言及や標示などは、字音の発音のためというよりは、当該漢字の韻書における所属巻の提示、すなわち、その漢字の韻書における音、意味、用法などを調べる上での便宜のために加えられている。しかし、『玉塵抄』には漢字音のことを真正

面にすえ、それに関わるいろいろな情報を集めて論じた講述が数多く見られるのもまた一方の事実である。すなわち、ここに、室町期叢林の儒学においては、旧仏教の漢字音研究も取り入れた、呉音漢音の分類、清濁の注記、仮名反切など、それなりの漢字音研究が盛んに行われていたと言えるのでないだろうか。

### 3. 今後の課題

本論文において残された課題はまだ多い。

まず、第一に、室町期の他の禅僧の抄物を広く精査して、『玉塵抄』から得られた日本漢字音研究に関することがらが、他の抄物、他の禅僧についてどの程度普遍性を持っているのか明らかにすることが必要である。

次に、当時の仏教(旧仏教)や博士家などにおける漢字音研究の実態をとらえ、それと本論文の成果を比較して、室町期叢林における漢字音研究の、漢字音研究史におけるその位置をより明確にする必要がある。

第二に、当時通行の漢字音との比較において『玉塵抄』そして叢林の使用する漢字音と『玉塵抄』などの漢字音が室町期漢字音においてどのような性格を持っていたのかを明らかにする必要がある。

その他、鎌倉期そして江戸期の漢字音や漢字音研究との関係を追究することなどもいざれ行わなければならない課題である。どの課題も簡単に解決することはできないが、今後一つずつ乗り越えて行きたいと思っている。